

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	京 都 府
-------	-------

学校の概要（平成 15 年 4 月現在）

学校名	京 都 府 京 田 辺 市 立 大 住 中 学 校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	5	3	1 8	3 2
生徒数	1 8 3	1 6 8	2 0 0	3	5 5 4	

研究の概要

1．研究主題

生徒の達成感を引き出す個に応じたきめ細かな指導方法の創造
------------------------------

2．研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

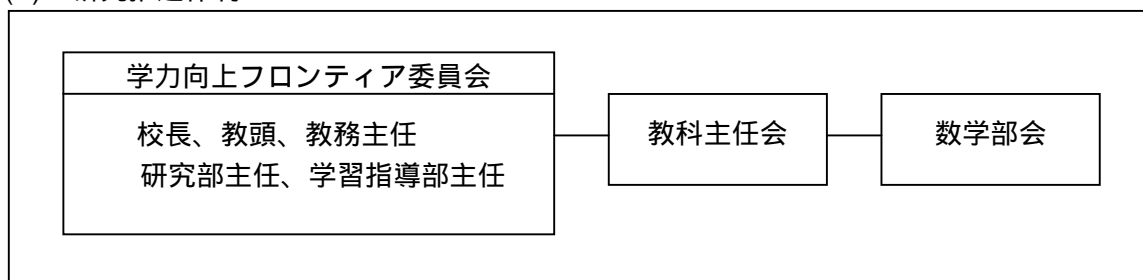
<p>全学年・数学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校入学の段階で、すでに習熟の程度に差が生じている教科のため。</li> <li>・ これまでの研究成果と生徒の実態から、学年の枠を広げ、研究に取り組むため。</li> </ul>
--

(2) 年次ごとの計画

平成 14 年度	<p>テーマ</p> <p>「生徒の達成感を引き出す個に応じたきめ細かな指導方法の創造」</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <p>生徒一人一人が「わかった」「できた」という達成感を持ち、より一層学習への意欲を喚起し、学力の定着を図るには、習熟の程度に応じた学習集団を編成するなど、個に応じたきめ細かな指導を行うことが必要である。</p> <p>また、生徒が意欲を持って、主体的に学習するには、数学的活動を積極的に取り入れた授業の工夫改善や、補充的、発展的な学習の教材作りなど個に応じた指導が展開できる教材・教具の開発が必要である。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>ア 教育方法加配を活用した少人数授業の研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒が達成感を味わい、意欲的に学習する少人数授業の研究</li> <li>・ 生徒選択による習熟の程度に応じたコース別学習の実践研究</li> </ul> <p>イ 選択教科における基礎コース、発展コースの設置及び教材研究</p> <p>ウ 評価計画の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1時間ごとの評価規準・評価方法が明確になった単元指導計画の作成</li> </ul>
----------------	---

<p>平成 15 年度</p>	<p>テーマ 「生徒の達成感を引き出す個に応じたきめ細かな指導方法の創造」 研究の見通し 生徒一人一人が「わかった」「できた」という達成感を持ち、より一層学習への意欲を喚起し、学力の定着を図るには、習熟の程度に応じた学習集団を編成するなど、個に応じたきめ細かな指導を行うことが必要である。 また、生徒が意欲を持って、主体的に学習するには、数学的活動を積極的に取り入れた授業の工夫改善や、補充的、発展的な学習の教材作りなど個に応じた指導が展開できる教材・教具の開発が必要である。 研究内容・方法 ア 教育方法加配を活用した少人数授業の研究 ・ 生徒選択による興味・関心に応じた課題別や習熟の程度に応じたコース別学習の実践研究 ・ 授業研究会による習熟度別授業の研究 イ 学習意欲を喚起する授業の工夫 ・ 数学的活動を取り入れた授業の研究 ・ 補充的、発展的な学習の教材開発 ウ 評価規準や評価方法についての研究 ・ 観点別評価規準・評価方法に、十分満足できる状況(A規準)、努力を要する状況への手立てを加えた評価規準表を、授業時間ごとに作成 ・ 評価計画に基づいた1時間ごとの評価活動の実践</p>
<p>平成 16 年度</p>	<p>テーマ 「生徒の達成感を引き出す個に応じたきめ細かな指導方法の創造」 研究の見通し 生徒一人一人が「わかった」「できた」という達成感を持ち、より一層学習への意欲を喚起し、学力の定着を図るには、習熟の程度に応じた学習集団を編成するなど、個に応じたきめ細かな指導を行うことが必要である。 また、生徒が意欲を持って、主体的に学習するには、数学的活動を積極的に取り入れた授業の工夫改善や、補充的、発展的な学習の教材作りなど個に応じた指導が展開できる教材・教具の開発が必要である。 研究内容・方法 ア 生徒一人一人が意欲を持って学習する少人数授業の一層の研究と実践 ・ 生徒選択による興味・関心に応じた課題別や習熟の程度に応じたコース別学習の実践研究 ・ 授業研究会による課題別、習熟度別授業の研究 ・ 個に応じたきめ細かな指導方法についての研究成果の紹介 イ 生徒が主体的に学習する授業の研究 ・ 数学的活動を取り入れた授業の研究 ・ 課題別や習熟度別授業におけるコースごとの教材開発 ウ 評価規準や評価方法についての研究 ・ 観点別評価規準・評価方法に、十分満足できる状況(A規準)、努力を要する状況への手立てを加えた評価規準表の充実(単元指導計画の一層の充実) ・ 評価計画に基づいた1時間ごとの評価活動の実践及び検証</p>

### (3) 研究推進体制



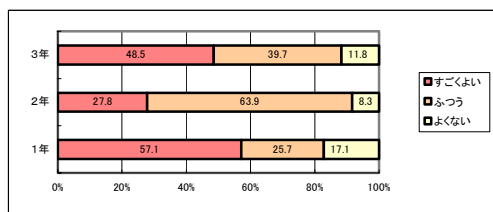
### 平成15年度の研究成果及び今後の課題

#### 1. 研究の成果

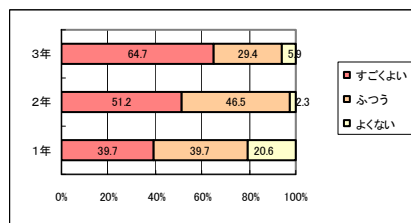
##### (1) 教育方法加配を活用した少人数授業の研究

習熟度別授業においては、自分に合った適切なコースを選択することが重要である。そのためコース選択時、各コースの目標・学習スタイルを示すとともに、具体的な課題(内容)を事前に生徒に明示し、生徒自らが自己責任により選択できるよう取組を進めた。単元終了ごとに、コース選択をすることで、多くの生徒は適切に選択することができるようになった。自分の選択したコースの満足度を調べたアンケートでは、AコースとCコースを選択している生徒について分析すると、コース選択が「すごくよい」と答える生徒が、3年生においては、48.5%、64.7%というように割合が高くなっている。特にCコースにおいて64.7%という高い値を示しているのは、学力の高い生徒も達成感、満足感を得ている現れであると考えられる。

< Aコース >

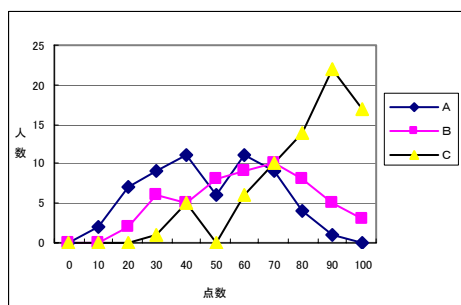


< Cコース >

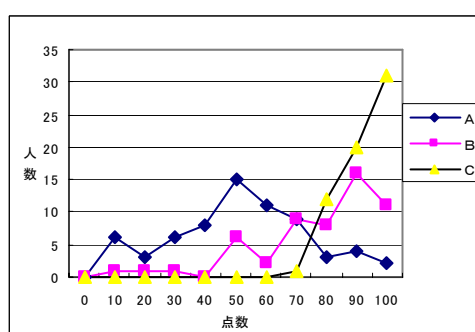


さらに、学力面においても、6月と9月に実施したテスト結果を比較すると、どのコースにおいてもグラフが右よりになっている。これは成績下位層だけでなく、すべての生徒において一定の学力の向上が見られたことを示している。

3年生 6月第1期テスト



3年生 9月第2期テスト



## (2) 学習意欲を喚起する授業の工夫改善

教材開発として、1つの基本となる教材をもとに、習熟の程度に応じた深め方(進め方)を目指した教材、多様なものの見方・考え方を旨とした教材作りに取り組んだ。

特に第1学年で行った課題解決学習では、「たった一つの問題から、こんなにたくさんの考え方が生まれるなんてビックリ。数学の世界って本当に不思議だなと実感した。またこのような問題にチャレンジしたい。」「こんなにたくさんの式が作れるなんて、とてもびっくりした。これからは1つだけではなく、いろいろな式を探してみようと思う。」という生徒の感想からも見られるように、達成感を持つと同時に、より一層学習への意欲を喚起することができた。



< Aコース授業風景 >

### < 第1学年課題学習プリント >

1年数学プリント Aクラス  
**考えよう!チャレンジしよう!**

1年( )組( )

右の図のように、1辺が2 cmの正方形を右と上に1 cmずつずらしながら、並べていきます。このとき、次の問いに答えなさい。

(1) この正方形の紙を何枚か並べたときにできる図形全体の面積について、下の表を完成させなさい。

正方形の数(枚)				
面積(c㎡)				

(2) この正方形の紙をx枚並べたときにできる図形全体の面積を、xを使って表してみましょう。

(3) この正方形の紙を何枚か並べたとき、図形全体の面積が、34 c㎡ になりました。何枚並べたときか、求めなさい。

1年数学プリント Cクラス  
**考えよう!チャレンジしよう!**

1年( )組( )

右の図のように、1辺が2 cmの正方形を右と上に1 cmずつずらしながら、並べていきます。このとき、次の問いに答えなさい。

(1) この正方形の紙をx枚並べたときにできる図形全体の面積を、xを使って表してみましょう。

(2) この正方形の紙を何枚か並べたとき、図形全体の面積が、55 c㎡ になりました。何枚並べたときか、求めなさい。

(3) この正方形の紙をy枚並べたときにできる図形のまわりの長さをyを使って表してみましょう。

(4) この正方形の紙を何枚か並べたとき、図形のまわりの長さが、48 cmになりました。何枚並べたときか、求めなさい。

### < 第2学年課題学習 >

Bコース

右の図において、xはどうやって求められるでしょうか。

この形に注目してください。△と△という字に似ていませんか。実は、

$$x = a + b + c$$

という関係が成り立つのです。

これを通称、「人形(ヒトガタ)の角に関する法則」といいます。(命名K・N)

なぜ、このような関係が成り立つのでしょうか。証明してみましょう。ヒント・・・1本の補助線がいる教えてくれるよ。

Cコース

右の図において、4つの角、a, b, c, xの間に、どのような関係が成り立つか、また、なぜそうなるのか考えてみよう。

証明の仕方は数通りあります。

1-2つ考えられたら・・・ good  
3つ # ... very good  
4- # ... excellent

## (3) 評価規準や評価方法についての研究

指導と評価の一体化を目指し、授業時間ごとに学習活動における具体的な評価規準、すなわち「評価方法を含んだ観点別評価規準」「十分満足と判断できる状況」「努力を要する状況への手だて」を明記した単元指導計画を作成した。その中で、授業時における評価を煩雑にしないように評価規準を2つまでに絞り込んだ。その結果、よりねらいが明確になった授業を展開することができた。また、少人数授業ともあいまって、一人一人をより細かく見ることができた。さらに、この単元指導計画をもとに定期テストを構成することにより、より指導と評価の一体化を図れたのではないかと考える。

## 2. 今後の課題

### (1) 学習集団の編成に関わって

ア コース選択時におけるガイダンスを強化し、さらには単元途中での形成評価(確認テスト)をもとにしたコース変更の機会を設けていくことも今後検討していかなければならない。

イ 基礎コースを2分割し、より人数を絞ってきめ細かく対応したために、標準コースの人数が増える傾向にあった。そのことにより、標準コースが他のコースに比べて生徒の理解度の幅が大きくなるという課題がでてきた。標準コースにおいても、今後より一層きめ細かな指導を実践していかなければならない。

### (2) 教材・教具の開発に関わって

ア 数学的活動を取り入れ、学習意欲を喚起する教材として、今後も研究を深め、課題学習のレポーターを増やしていく必要がある。

イ 発展的な学習、補充的な学習の教材として、単なるドリルを使った反復練習、難問をそろえたプリント学習も時には必要だが、やはり、1つの教材をもとにそのコースに応じて深めていけるような教材作りを今後も研究していかなければならない。

### (3) 評価規準や評価方法について

ア 一部の単元で「評価方法を含んだ観点別評価規準」「十分満足と判断できる状況」「努力を要する状況への手だて」を明記した単元指導計画を作成したが、すべての単元にまで広げていくことが課題である。

イ 評価方法については一定のシステムができたが、そのことの検証は絶えずしていかなければならない。関心・意欲を問うような定期テストの問題作成、さらに観点別評価から評定を導くことについても、今後研究を深めていかなければならない。

## 学力把握のための学校としての取組

(1) 単元終了ごとに、単元確認テスト及び学習状況についてのアンケートを実施

(2) 定期テストにおける得点分布の分析

(3) 年度末に、標準学力検査を実施

(4) 生徒を抽出して、小学校からの学力実態の追跡調査を実施予定

## フロンティアスクールとしての研究成果の普及

(1) 平成15年12月4日(木)、研究発表会を開催

(2) 研究成果をHPに掲載していく予定

(3) 平成16年2月24日(火)、26日(木)、総合教育センターで発表

(4) 視察への対応

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校

【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上

【指導体制】  少人数指導  T.Tによる指導  
 その他

【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無